「そんなの出来ない。やりたくない。」
～患者と作業の目的を共有し意欲の向上を目指して～
野口歩美

【はじめに】
作業療法で決まった活動を行い拒否的かつ依存的な症例に対し,関心に基づく作業を提供し目的を共有した事で意欲の向上に繋がった.症例を通して作業の目的を共有する事の重要性を再確認したため報告する.尚,症例と当院倫理委員会より同意は得ている.

【対象】
症例は 50 代女性,慢性期統合失調症.定期的に作業療法に参加するが,毎回読書を行い意欲の低下がみられる.また慣れない活動には拒否的,依存的となり中断する事が多い。そんな中,親しい他患(以下 A)が転棟し,更に集中力や意欲は低下した.

【方法】
意欲の低下に対し A との接点を持てるくす玉作りを実施した.また退院を視野に,日常生活上の課題把握の為,作業に関する自己評価改訂版を実施し,「ロッカーの洋服整理が出来ない」と症例が認識した.介入に拒否的だが,退院に向けて必要であると目的を伝え,更に洋服のたたみ方の手本を提示し,作業療法士との共同作業という方法にて,ロッカー整理に介入した.

【結果】
くす玉作りでは拒否や中断なく取り組み,完成したくす玉を A に贈った.その後,他の活動に関心を示したり他患に折り方を教える等の様子がみられた.ロッカー整理では,退院という目的を伝える事で意欲が芽生え反復して実施可能となった.更に洋服のたたみ方の注意点にも着目し始め,依存性は減少した.最終的に洋服たたみを症例自身で行うようになり「出来るようになったよ」と笑顔がみられた.

【考察】
A との繋がりや退院という関心に基づく作業の目的を共有する事で,症例が目的を理解する事が出来,意欲が向上したと考える.また拒否的,依存的な症例に細かく工程を提示した事や支持的な共同作業を実施した.これらが更に意欲が向上した要因となり,成功体験を重ねた事で自信に繋がり依存性が減少したと考える.症例を通して作業の目的を共有する事や患者にあった方法を取り入れる事の重要性を再確認した.